

戦後の学校給食

学校給食への救援物資

終戦直後に、国際連合救済復興機関のフーバー(元アメリカ大統領)が日本を訪れ、子どもの栄養状態が大変悪いのを知りました。そして、子どもの栄養状態を改善するために学校給食物資の提供を申し出ました。また、アメリカからは小麦粉の援助がありました。

昭和21年12月に、東京都、神奈川県、千葉県と同時に、川崎市で学校給食が再開されました。市内の全小学校でミルク給食が開始されました。

昭和22年3月からは、ミルクの配給がなくなり、代わって鮭、鯨、にしんなどの缶詰が配給になりました。缶切り道具がないので、男性教員が苦勞して缶を開けたそうです。

困難な食材購入

給食の基本物資は政府から供給の見通しがありましたが、副食は各学校が食材を準備しました。味噌汁を作る学校、雑炊を作る学校、地域の食材を生かす学校等、それぞれ工夫していましたが、全く食材を調達できない学校もありました。

給食の食材購入は教職員の仕事でした。特に、校長先生から食糧調達を依頼された教職員は、常時飢えに苦しむ子どもを前にして、積極的に協力したそうです。各学校の校長先生方は給食の仕事を一生懸命にしている先生方を見て「教室へ行けない先生を早く教室へ」を合言葉に、お互いに相談したり教育委員会にお願いに行ったり等の努力をしました。

給食調理が大変

給食を調理する人がいないので、女性教員や保護者の方に頼っていました。女性教員は過勞が続き、しかも教室で学習指導ができないので問題になりました。

調理に必要な燃料確保も大変でした。山林の伐採、流木の収拾、工場や倒壊家屋の木材屑を利用する等、創意工夫をしました。